



# 2016年度 天文資料

平成28年度 第11号 (2月号)

平成29年 2月18日

発行：佐世保市少年科学館

佐世保市少年科学館



## <2月は宵の明星金星の光度が最大、下旬には月、惑星、彗星が集合>

このところ夕方西の空で、とっても明るく輝いて人目を引く存在の宵の明星金星が、2月中旬には最大光度の**-4.6等級**となります。今月はひときわ明るい宵の明星を楽しむことができるでしょう。その金星の少し上には赤い火星が輝いています。また、肉眼では見えませんが火星の近くには天王星もあり、特に**2月27日には火星に大接近**します。また、2月の終わりから3月の初めにかけて、エンケ彗星や細い月が集合し、にぎやかな西の空となります。今回はこの金星と月、惑星、彗星の集合についてご紹介いたします。

## <2月下旬は、金星・火星・天王星・エンケ彗星が接近>

夕方西の空を見てみましょう。とっても明るく輝く星それが金星です。

かなり明るいうちから見え始めます。2月中旬の明るさは、**-4.6等級**、よく見たら昼間でも見つけることができるほどです。

この金星、今地球に近づいていますが、地球の内側にあるために三日月のように大きく欠けているのです。肉眼ではわかりませんが、望遠鏡で見ると、その様子がよくわかります。

金星のやや左上には、火星が輝いています。明るさは**1.3等級**、西の空では金星の次に見え始めます。3月1日には、さらに細い月が加わり、とてもにぎやかな西の空となります。

火星のすぐ下には、天王星があります。明るさは**5.9等級**なので、肉眼での観察はちょっと無理でしょう。望遠鏡があれば、火星のすぐ下を探してみましょう。

そして、金星の下の方には、エンケ彗星があります。明るさは**7.4等級**なので、観察には双眼鏡または望遠鏡が必要です。このエンケ彗星は、太陽のまわりを回る周期が約**3.3年**という、現在知られている彗星の中では最も周期の短い彗星です。

この彗星は、1786年にフランスの天文学者ピエール・メシャンによって発見されました。その後、1795年、1805年、1818年にも確認され、1822年にドイツの天文学者ヨハン・フランツ・エンケの軌道計算により、この彗星が太陽のまわりを約**3.3年**周期で公転することが確認されました。その後この彗星は、「エンケ彗星」と呼ばれるようになりました。

このエンケ彗星は、おし座流星群\*1の母天体\*2です。太陽に最も近づくときの太陽からの距離は**0.3au**\*3、水星の軌道の内側まで入り込みます。今年の5月10日に太陽に最も近づきます。

\*1 毎年11月前半に出現するおし座に放射点がある流星群。プレアデス星団(すばる)のすぐ下に放射点がある「北流星群」と、それよりやや下に放射点を持つ「南流星群」とがある。南流星群の極大は11月5日ごろで、北流星群の極大は11月12日ごろ。

\*2 流星群を起こすもとになる彗星などの天体。彗星が太陽に近づくと、太陽の熱によって彗星本体を形成するチリなどが放出され、彗星の通過した軌道上には、大量のチリが残される。そのチリの中を地球が通過すると、チリが地球の大気圏に突入し、大気との摩擦によって発光し、流星群の出現となる。

\*3 「au」は「天文単位」、1天文単位は地球と太陽の間の距離、約1億5000万km。

